



Title	過去と完了 : 語り手と視点
Author(s)	福沢, 将樹
Citation	国語国文研究, 109, 18-33
Issue Date	1998-05-30
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/94759
Type	journal article
File Information	kokugokokubunkenkyu_109_18-33.pdf



過去と完了

——語り手と視点——

第一章 テンスとアスペクト

第一章第一節 パーフェクティブとインパーフェクティブ

拙稿（一九九七）は日本古典語の述語をタリ・リの有無を通して考察したものである。そこでの結論を言い換えると次のようになる。

- 一、同じ形態をした動詞でも、パーフェクティブの用法とインパーフェクティブの用法とを兼備することが少なくない。
- 二、眼前描写^述的な文章では、全ての述語がインパーフェクティブである。

「パーフェクティブ」「インパーフェクティブ」の規定はコムリー（一九七六）によると次のようである。

福 沢 将 樹

John was reading when I entered.

（前略）第二の動詞は、（ここでは、私の入室）を示す場面の全体を示していて、その内部の時間構成への言及はない。場面の全体は、単一の分析不可能な全体―開始・中間・終了が一つになったもの―として示されている。つまり、入室動作を構成する個々の局面に、この場面を分割しようとはしていないのである。この意味を持つ動詞の形式は、「パーフェクティブ」の意味を持つと言われている。（中略）

もう一方の形式（インパーフェクティブ―福沢注）―ジョンの読書の場面への言及―はこれのように（パーフェクティブのようには―福沢注）その場面を示していない。寧ろ明らかに場面の内的な時間構成に言及している。この例では、特に、ジョンの読書の中間部分に言及されていて、読書の開始・終了ははっきり言及されていない。

（コムリー（一九七六、三〇四頁、拙訳）

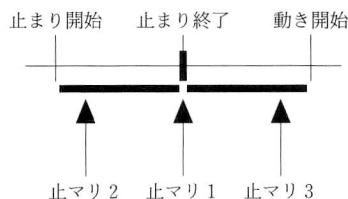
一方、工藤（一九九五）における「完成性＝限界づけられ性」ではこの「パーフェクティブ」に当たるものを、「ひとまとまり性」と「限界達成性」とに区別している。

（１）〈ひとまとまり性〉運動（動作、変化）の成立＝開始限界から終了限界までを全一的にとらえる

（２）〈限界達成性〉開始の時間的限界が終了の時間的限界のどちらかのみをとらえる
（工藤（一九九五）、八十頁）

拙稿（一九九七）では「参りたまふ」「め（眼）ぞとまる」「思ふ」等を取り上げ、眼前描写的な文ではこれらの非タリ・リ形（いわば単独形）が〈進行〉か〈持続〉を表すとした（図表一）。

図表一



右の図で止マリ１が「パーフェクティブ動詞」で、止マリ２と３が「インパーフェクティブ動詞」というふうに、同じ「止マリ」という語形であっても、別の動詞と考えた。

このようにすると、「終了限界達成」だけでなく「開始限界達成」だけでも一つの動詞ということになり、いずれも「ひとまとまり」として記述できることになる。一方、開始から終了までをすべて含みこむ、工藤氏の「ひとまとまり性」を表す単独の動詞を想定できなくなるが、そうした概念を表す用例は眼前描写文ではない。言い換えれば「ひとまとまり性」は状況説明文での概念で、眼前描写文では「限界達成性」と「インパーフェクティブ」のみが現れるということである。

ところで古典物語に限らず、近代小説の地の文においても、次のように非過去形で叙述するものがしばしば見られる。

三本のトランペットがテント内に鳴りわたる。それを合図に六頭の馬が背の鞍に曲馬師を乗せたまま、前足を蹴りあげ揃っていない。曲馬師たちは片手で馬の首をかかえ、残った片手を高々と振って、盛大な拍手の渦巻く客席に微笑を向ける。

この急な熱い音の波に、ミミは肩を震わせてまどろみから醒める。おぼろな視界に波はぐんぐん膨らみ、巨大なシャボン玉に似てミミの全身を囲いこんで破裂したかと思うと、その飛沫は聞き慣れた拍手の泡立ちになる。
（空中ブランコ）

これらのテンスが過去でないことは言うまでもないが、アスペク

トは何であろうか。高橋・工藤両氏の枠組みでは「完成相非過去」

ということになりそうである。しかし、「パーフェクティブ」と考えても「インパーフェクティブ」と考えても問題がある。

スラブ語の動詞には「完了体」と「不完了体」とがあるが、前者が常に「パーフェクティブ」、後者が常に「インパーフェクティブ」だと言つてよい。

『空中ブランコ』のような文章を「パーフェクティブ」とすると、「パーフェクティブ現在」というのがそもそもありうるのかという疑問が出てくる。しかしコムリー（一九七六）によると、「完了体現在形」で物語を叙述することは、ロシア語では不可能だがグルジア語やブルガリア語では可能であるという。そのためロシア語では「完了体未来形」と呼ぶ。従つて、ロシア語型の言語とグルジア・ブルガリア語型の言語では何か発想が違うことがわかる。

一方、『空中ブランコ』の文章を、拙稿（一九九七）のように「インパーフェクティブ」と考えることもできる。しかし先の文章を過去形に変えると、「パーフェクティブ過去」になり、「インパーフェクティブ過去」とは考えにくくなる。すると、現在形で「インパーフェクティブ」のものが過去形ではどうして「パーフェクティブ」になるのかという疑問が出てくる。

これらの疑問には後に答えることにする。

第一章第二節 基準時

テンスを論ずるに当たつて、「基準時」を想定することは必須である。「現在」・「過去」・「未来」とは、「基準時」との前後関係として

定義されるからである。

しかしいかなる時を「基準時」とすべきかで問題があり、ライヘンバッハの時制論では、「発話時」（原書では「発話の時点」）に並んで「設定時」（同^{注三}「言及の時点」）も想定されている。「発話時」と「出来事時」（同「事象の時点」）だけでは、「過去」と「現在完了」の区別がつけられないが、「設定時」を設けることによって、この問題を解決している。つまり過去形は「設定時」が過去にあるが、現在完了形の「設定時」は現在にあると考えている。ここではテンスとは「発話時」と「設定時」との前後関係となる。

しかし、この「発話時」や「設定時」のそれぞれに時間的な幅がないと考えるべきか、幅がない場合もある場合もあると考えるべきか、今一度考えてみる必要がある。

まず「現在」の概念を明らかにしなくてはならない。

ライヘンバッハの時制論で「現在」とは、「出来事時」と「設定時」と「発話時」とが全て一致するものである。「出来事時」にある程度の幅があれば、「発話時」や「設定時」がごく短い、点的な瞬間でも一致することができる。即ち、「出来事時」の時間帯の中に「発話時」や「設定時」が包摂される形である。しかし、「出来事時」もまた瞬間の場合（パーフェクティブ^{注四}）、「出来事時」が「発話時」や「設定時」と一致するには、「発話時」「設定時」と「出来事時」がびつたりと一致するか、「発話時」「設定時」に幅を持たせるか、どちらかなくてはならない。前者はいわゆる遂行動詞の場合である。実況中継も含めてよいかもしれないが微妙である。なぜなら一見瞬間的な出来事のように見えても、中継者には過程がはっきり捉えられ

ているのかもしれないからである。従つて少なくとも遂行動詞ならば「パーフェクティブ現在」はありうることになるが、それ以外の動詞ではどうだろうか。

そこで前節の議論に戻る。〈点的な出来事〉以外の「パーフェクティブ動詞」は、必ずと言っていいほど、それに後続する事象を結果・効果として持つ。従つて、同じ出来事を表す表現でも、出来事そのものに注目すれば「パーフェクティブ動詞」となり、後続する結果・効果に注目すれば「インパーフェクティブ動詞」となる。或いは、ロシア語の動詞単独の非過去形のように、現在進行中の出来事として把握すれば「インパーフェクティブ」(不完了体現在形)になり、未来(予想・計画)として把握すれば「パーフェクティブ」(完了体未来形)になる。前節の止マリの例で言えば、出来事そのものは「止マリ1」として、後続する結果は「止マリ3」として現れる。

つまり、物語の叙述が「パーフェクティブ現在」で、かつ、「設定時」が瞬間だとしても、それは「設定時」の直前に起きた出来事か、直後に起きそうな出来事かのどちらかを表現したものとして解釈することができる。「設定時」においては直前に起きた出来事の結果・効果として把握されたり、直後に起きそうな出来事の予兆・計画として把握されているのである。たまたまそれが出来事そのものに焦点が当てられたために、「パーフェクティブ」として実現したにすぎないのであって、結果・効果または予兆・計画に焦点が当てられれば「インパーフェクティブ」として表現されてもおかしくない。

こう考えると、「設定時」が瞬間であつても、一般に「パーフェクティブ現在」はありうることになる。但し「現在」に「パーフェク

ティブ」と「インパーフェクティブ」の対立を持つ言語より、「現在」を「インパーフェクティブ」として扱う言語の方が普通で、「パーフェクティブ」しかない言語は恐らくないということも確かであろう。

その一方で、「設定時」を敢えて幅のある時間帯としてみる場合もあるだろう。「彼はこのごろ機嫌がよい」など。しかし、こうした例は眼前描写文ではなく状況説明文である。眼前描写文では「設定時」を瞬間として構わない。状況説明文で一見「設定時」が幅のある場合があるように見えることについては別の機会に取り上げる。

第一章第三節 完了と近接過去と単純過去

「完了」という用語も曖昧である。その原因としては、「完了」という日本語のニュアンスの問題だけでなく、西欧語の「完了形」の多義性にも由来する。英語の「完了形」には過去の具体的な出来事を表す性質は希薄だが、フランス語の「複合過去」ではそうではないと考えられている。

コムリー(一九七六)は「パーフェクト」を次のように規定している。

「パーフェクト」という用語は、現在への関係を持つ過去の場面、例えば過去の出来事の現在での結果をいう (his arm has been broken)。(コムリー(一九七六)十二頁、拙訳)

より一般的にいえば、パーフェクトは、ある過去の場面がひきつづき現在にまでかわつてくることをしめしているのである。

る。(コムリー(一九七六)五十二頁、山田訳八十三頁)

また同書で「結果のパーフェクト」「経験のパーフェクト」「持続する場面のパーフェクト」「近接過去のパーフェクト」の四つに分類^{注七}する。フランス語などでは同じ形式が「単純過去」の意味にも使われるようになっているが、コムリー(一九七六)は前四者と後一者で線を引いた。つまり、現在へ何らかの関わりがあるか、ないかである(五十二頁)。言い換えれば「単純過去」は過去だが、「パーフェクト現在」は過去の出来事を表していても現在だということである。

しかし「We've lived here for ten years.」のような「持続する場面のパーフェクト」は西欧語でも珍しい例で、殆ど「インパーフェクティブ現在」と言ってもいいくらいである。「I live in Sapporo.」のような単純な現在形も、考えようによっては過去における「定住開始」から現在に至るまでの持続であるから、意味的に「持続する場面のパーフェクト」と考えることも不可能ではない筈である。このような例文を「パーフェクト」のうちに含めないとすれば、その理由は「完了形」が用いられていないというただ一点に帰せられる。

また第一章第一節で拙稿(一九九七)を紹介したように、およそ「インパーフェクティブ動詞」というのは、開始時点を表す同語形の「パーフェクティブ動詞」を潜在的に持っていることが少なくないのであって、その「パーフェクティブ動詞」の(広義の)「結果」・「効果」が「インパーフェクティブ動詞」なのである。このように考えると、普通の「インパーフェクティブ動詞」と「完了」との意味論的区別はなかなか難しいのである。

このように、テンス・アスペクトの意味と形式との関係は非情に曖昧で複雑である。過去の出来事を現在の時点から見たものをどう表すかという点について、一度整理してみる。(図表二・三)

図表二

パーフェクト	意味の中心	もしも一語で言ったら
結果	現在	インパーフェクティブ現在
経験	現在／過去	インパーフェクティブ現在／パーフェクティブ過去
持続する場面	現在	インパーフェクティブ現在
近接過去	少し過去	パーフェクティブ現在 ^{注一}
非パーフェクト	意味の中心	もしもパーフェクト形で言ったら
パーフェクティブ現在 ^{注一}	少し過去	近接過去
インパーフェクティブ現在	現在	結果／その他種々
パーフェクティブ過去	過去	経験 ^{注二}
インパーフェクティブ過去	過去	経験 ^{注三}

注一 右の「パーフェクティブ現在」は、予想・計画の方ではなく、近接過去の出来事の結果が持続・進行するものの方に限る。

注二 「過去」は現在に対する関わりを必ずしも持つていないから、正確にはパーフェクトには置き換えられないとすべきである。もしも置き換えられる場合だとすれば、「経験」の用法になるという意味。

図表三

	概 念 図 ^{注1}	例 文	
結 果		John has arrived. ^{注2}	太郎が来ている。
経 験		Bill has been to America.	次郎は一度アメリカに行っている。
持続する場面		We've lived here for ten years.	太郎はここに10年も住んでいる。
近 接 過 去		Bill has just arrived.	次郎が今着いた。
パーフェクティブ現在		<i>dainaxavs daḡidebul žors da iṭqvis...</i> ^{注3}	(太郎が戸を叩く。)
インパーフェクティブ現在		<i>Čuka djado Ivan—nikoj ne mu se obadžda.</i> ^{注4}	太郎が戸を叩く。/次郎が部屋にいる。
パーフェクティブ過去		<i>dainaxa daḡidebuli žori da tkva...</i> ^{注3}	(太郎は戸を叩いた。)
インパーフェクティブ過去		<i>Carja špjaše...</i> ^{注5}	次郎は部屋にいた。

注一 △は発話時、▲は設定時を表す。二つが重なっているものは「現在」を表し、▲が△より左にあるものは「過去」を表す。太線は意味の焦点を表す。

注二 上の四文はコムリー（一九七六）より。

注三 コムリー（一九七六）によるブルガリア語の例（七十四頁）。意味は「彼は荷をつけたらばをみる／みた。そしていう／いった」

注四 ……（山田訳を参照）

注五 コムリー（一九七六）によるブルガリア語の例（七十五頁）。意味は「王はねむっていた。」（山田訳を参照）

「結果のパーフェクト」は、結果の残存のみに注目し、その開始の出来事については含意されるにすぎない。従って横線を太くし、開始の縦線は細く描いた。これに対して「経験のパーフェクト」は、経験という形で保持しているという点で「結果のパーフェクト」と似た性質を持つが、その開始に当たる出来事自体についても意味が強く表される。従ってどちらも太線で描いた。「持続する場面のパーフェクト」は持続そのものに注目するのであって、その開始の出来事については意味が弱いと思うので縦線を細くしたが、英語を母語とする人々にはもしかしたら開始の出来事にも強い意味が感じられるのかもしれない。

これらに対して「近接過去のパーフェクト」はまったく出来事の

みに注目するのであって、その出来事の結果生まれる効果については殆ど気がつかれない。従って縦線を太くし、横線は細くしただけでなく破線として描いてみた。

以上は「パーフェクト」の説明だが、動詞一語で表されたものも全く同じ方法で記述できる。「パーフェクティブ現在」と「インパーフェクティブ現在」は、形式を区別する言語は多くないが、「パーフェクティブ現在」は出来事を「パーフェクティブ」として捉えながら、「設定時」においては出来事の直後の結果・効果を把握するものであり、「インパーフェクティブ現在」は逆に結果・効果を自体で出来事として捉えるものである。英語の *live, see* 等の現在形は、進行形を取らないからといって「パーフェクティブ」ではなく、単独で「インパーフェクティブ」を表すと考えられる。言文一致以前の日本語動詞も基本的にそうである。現代日本語動詞は単独で非過去形として用いることは少なくなつたが、用いられた場合は同様に「インパーフェクティブ」として用いられる。

しかし、「パーフェクティブ現在」と「インパーフェクティブ現在」の区別が現れないだけで、「パーフェクティブ現在」ではないとは言えないのではないかという反論も予想される。それについては次のように答えたい。

先の図を見てもわかるように、「パーフェクティブ現在」は「インパーフェクティブ現在」よりも「近接過去のパーフェクト」に近い性質を持つ。にも拘らず、多くの言語は「パーフェクティブ現在」と「近接過去のパーフェクト」とを同じ形式で表すことはないと考えられる。なぜなら、「パーフェクティブ現在」とは動詞一語の形式

につけられる名であり、「近接過去のパーフェクト」とは動詞と助動詞(接辞)との複合形式につけられる名だからである。「*Bill has just arrived*」のような「近接過去」は、「過去用法」の一種とする立場もあってよい。しかしコムリーがそうしなかったのは、なるべく一つの形式に一つの意味を考えると考えるのが筋だからである。つまり「arrive」の「出来事時」が「発話時」から見て過去にあつても、「現在完了形」一般の用法と共通点が見られるのなら、形式が「現在完了形」である以上、「過去」の一種ではなく「パーフェクト」の一種として扱うのである。同様に、「みな参り給ふ」を「パーフェクティブ」と私が見ないのは、「インパーフェクティブ」としても解釈できるならなるべく他の非過去形同様、「インパーフェクティブ」の一種として解釈するのが本当だと考えるからである。動詞の非過去形が現在を表した用例を見ると、どうしても「インパーフェクティブ」に思えるものは多数あるが、どうしても「パーフェクティブ」に思える用例というのはなかなかないものである。「現在」の意味としては「インパーフェクティブ」の方が似つかわしいのである。

以上は「現在」の話だったが、「過去」はこれらと似て非なるものである。先の図を見ると、「パーフェクティブ過去」に太い縦線のある点は「近接過去」等と似ている。しかし決定的に違う点は、「現在」は「設定時」が「発話時」と一致しているのに対し、「過去」は両者がずれているという点である。

尤も、「設定時」というのは意識されにくいのも確かである(特に一文のみを観察した場合)。パーフェクト形が単純過去の意味に使われるようになった言語はフランス語や日本語に限らない。これは「設

定時」がどこにあっても「出来事時」が過去にありさえすればその形式が用いられることになったからである。

次章では、「設定時」が具体的にどのような意味として解釈されるかを考えてみる。

第二章 テクスト

第二章第一節 語り手と視点

基本的に、意味のあるあらゆる文に「語り手」と「視点」とがある^{注八}と考ええる。

『物語論辞典』によると次の通りである。

narrator (語り手) テクスト中に刻印されている語る人。少な

くとも、物語には一人の語り手がおり、(中略)

語り手は物語に内在的であって、外在的な現実の具体的な作者とは区別されなければならない。(中略)

語り手は、また、内包された作者 (implied author) とも区別されなければならない。後者は、状況・事象を報告することはないが、状況・事象の選択、配分、統合には責任を持つと考えられる。(後略)

point of view (視点) 物語られる状況・事象が提示される際の知覚・認識上の位置。焦点化 (focalization)。パースペクティブ (perspective)。見地 (viewpoint)。(後略)

次のような文では「語り手」と「視点」とは同一人物であると考えられている。

(前略)自分は蠅を驚かして水へ入れようと思った。不器用からだを振りながら歩く形が想はれた。自分は踞んだまま、傍の小鞠程の石を取上げ、それを投げてやった。自分は別に蠅を狙はなかった。狙つても逆も当らない程、狙つて投げる事の下手な自分はそれが当たる事などは全く考へなかった。石はこつといつてから流れに落ちた。石の音と同時に蠅は四寸程横へ跳んだやうに見えた。蠅は尻尾を反らし、高く上げた。自分はどうしたのかしら、と思つて見てゐた。最初石が当たったとは思はなかった。蠅の反らした尾が自然に静かに下りて来た。すると肘を張つたやうにして傾斜に堪へて、前へついてゐた両の前足の指が内へまくれ込むと、蠅は力なく前へのめつて了つた。尾は全く石についた。もう動かない。蠅は死んで了つた。自分は飛んだ事をしたと思つた。(後略)

(城の崎にて、傍線福沢)

しかし、ジュネット(一九七二)が指摘するように、同一人物であっても「語り手」としての「私」と「視点」としての「私」とは概念上別のものである。過去の時点において行動したり見聞したり思考したりする「視点」としての「私」は、現在語っている「語り手」としての「私」とは別の機能を持つ主体である。これを時制と絡めて考えると、「語り手」と「視点」との時間上の前後関係が時制

（テンス）として解釈される。これに対して「語り手」自体は常に現在であり、別の言い方をすれば、時制を与えられない（超時的な）存在である。つまり「語り手」は「発話時」において、「視点」は「設定時」にいる。

右の引用部で破線を付した「全く考へなかった」「最初」思はなかった」などは、「語り手」に「視点」があるのだと考える向きもあるかもしれない。しかしこの場合も「全く考へな（い）」「最初」思はな（い）」という命題を作る「視点」があり、「語り手」はその視点を過去のものとして把握する主体である。両者がたまたま同一人物だと考えられているにすぎないのである。言い換えれば、本稿では「語り手」を人間と捉えるのではなく、機能として捉え直しているのである。

次のような例は「私」の代わりに人格の希薄な「語り手」が設定されているが、この場合も、透明人間のような非人称の人物が「視点」として張り付いており、「非人称の語り手」が「非人称の視点」を使って叙述していると考えられる。

警察での審問は割に長くかかった。運転手は女の児が車の直ぐ前に飛び込んで来たので、電気ブレーキでも間に合はなかった、と申し立てた。工夫等はそれを否定した。狼狽して運転手は電気ブレーキを忘れてゐたのだ、最初は車と女の児との間にはカナリの距離があったのだから直ぐ電気ブレーキを掛けさへすれば、決して殺す筈はなかったのだ、といった。監督は其間で色々とりなさうとしたが、三人はそれには一切耳を貸さな

かった。そして時々運転手の方を向いては「全体手前がドザなんだ」と、こんな事をいって、けはしい眼つきをした。

（正義派、下）

また次のような文では、「語り手」と別個の「視点」は想定しにくいかもしれない。

第二次世界大戦の終結とともに、天皇は自らその神権を否定され、新憲法は、主権は国民にあり、天皇はその統合の象徴であると規定した。ここには、連合軍による指示もあったが、多くの自由主義者の声にこたえたものであり、同時にまた、日本の古来の天皇の伝統を発展的にうけついでものといつてよかった。

（日本の歴史Ⅰ）

しかしこのような例文でも、『城の崎にて』の破線部のように、具体的な場面から超越した位置から俯瞰して物事を関係づけることのできる「非人称の視点」が存在し、「語り手」はその視点を使って叙述するものと考えたと理論は一貫する。

第二章第二節 テキストとテンス・アスペクト

糸井（一九八二）・工藤（一九八九・一九九五）ではタに「現在の用法のあることを指摘している。つまり、「パーフェクト現在」と「パーフェクト過去」とが日本語では全く同じ形式で表されるのである。但し工藤氏は、小説の地の文で連続した事象を表す文は全て

過去であって、「パーフェクト」ではないとしている。

小説が過去形のみで書かれる（語られる）ものなのであれば、小説に「パーフェクト現在」のタは現れないことになる。しかし、日本語の小説では英独仏に比べて遙かに頻繁に現在形が現れる。言文一致以前にはむしろ現在形が基本であったと言ってもよいくらいである。ならば、過去だと思われていたタ形が実は「パーフェクト現在」であるという可能性についても考慮しなくてはならない。

ここで日本語の語構成を考えてみよう。英語の不規則動詞やフランス語と違って、日本語では、過去形と現在形とがパラダイムを成しているのではなく、連用形と終止形というパラダイムを成していると考えられている^{注十一}。つまり、終止形が「インパーフェクティブ」であり、連用形が「パーフェクティブ」であると考えることはあながち不可能ではないということになる。

更に話法の解釈も加えると、現代日本語の終止法のタ形の解釈は、次のような可能性に分かれる（図表四）。

図表四

視点	語り手		人称性あり（登場人物と一致）		非人稱（登場しない）	
	人称性あり（登場人物と一致）	完了	自由直接話法 現在完了	過去	現在	過去
非人稱（登場しない）	非完了	完了	（現在）	自由直接話法 過去	（現在） 歴史的現在 現在完了	代行描写 過去
人稱性あり（登場人物と一致）	非完了	完了	（現在）	自由直接話法 過去	（現在） 歴史的現在 現在完了	代行描写 過去

人格の濃さに拘らず、登場人物としてではない主体を「非人稱」として扱った。

図表四は、タ形の分布を示したものである。現在・非完了は非タ形になってしまうので、「（現在）」と記して考察の対象から外す。過去・完了は、原理的にはシタ形に更にタが下接してシタツタのような形になる筈だが、標準的な語法ではないし、純粹なタ形でもないで、「×」印を記す。次に「視点」が「非人稱」で「語り手」が「人稱性あり」登場人物」という組み合わせは、理論上ありえない（登場人物は「非人稱の人物」の存在も、彼の認識した内容も、知らない筈）ので、欄全体を斜線で消す。残った欄が、タ形として実現する組み合わせである。

まず右上の、視点が「人稱性あり」登場人物」で語り手も「人稱

性あり＝登場人物」というのは、当該人物の認識の言葉が直接表現されたもので、「自由直接話法」ないし「内的モノログ」と呼ばれる。しかし「語り手」が本当に登場人物なのか、それとも別の人格（「作者」と呼ばれることも少なくないが、ここでは「非人称」の一種としておく）が「語り手」として、当該登場人物の認識を代弁しているのか、はつきりしないものがしばしば現れる。右下がそれで、「代行描写」^{注十二}（描出話法、体験話法、自由間接話法）などと呼ばれる。最後に左下の、「視点」も「語り手」も共に「非人称」の場合が、普通の「地の文」となる。そのうち、「語り手」と「視点」の位置が一致している場合は現在形となるので、「歴史的現在」である。過去形による客観描写とは、表の一番左下のごくごく限られたパターンにすぎない。

さて、状態性用言のタ形は「完了」ではなく「過去」であると言つてまずは間違いないが、動作性用言のタ形が問題である。工藤（一九八九・一九九五）はタ形を「過去」か「パーフェクト」かに分類するのだが、その「パーフェクト」はコムリーのものよりかなり外延が狭い。

ある設定された時点において、それよりも前に実現した運動がひきつづき関わり、効力を持つていること

（中略）

① 発話時点、出来事時点とは異なる〈設定時点〉が常にあること。（次の括弧内省略）

② 設定時点にたいして出来事時点が先行することが表されて

いて、テンズの要素としての〈先行性〉を含んでいること。③ しかし、単なる〈先行性〉ではなく、先行して起こった運動が設定時点とのむすびつき＝関連性をもっていることとらえられていること。つまり、運動自体の〈完成性〉とともに、その運動が実現した後の〈効力〉も複合的に捉えるというアスペクト的要素を持つていること

（工藤（一九九五）、九十九頁）

ここでは「シテイル形式」を例に挙げた記述である。右の引用文だけではコムリーのものと大差ないように見えるが、ポイントは「効力」というものをどの程度認めるかという問題である。

タ形について工藤（一九九五）では「過去の一連の出来事の時間的展開を述べる時には、〈完成相過去〉のシタであって、パーフェクト相現在ではない。」（百三十一頁）としている。そこで挙げられた例は次のようなものである。

「それから、わたしはうちへ帰ったの。そしてテレビをつけた。今日のお買物案内というのが終わって、すぐニュースが始まったわ。つまらないから切っちゃった」
（傍線は工藤）

「帰った」は過去の出来事の回想であって、現在への効果はないという趣旨である。しかしよく考えると、次の「テレビをつけた」はこの主体が帰宅せずに外を歩いていたなら起こり得ない出来事である。従って「帰った」はこの文脈では、その結果・効果として主体

の在宅を含意し、「テレビをつけた」の背景の下準備を提示している。「ニュースが始まった」もその前の「テレビをつけた」が下準備としてある。このように、寧ろ「一連の出来事」を述べるテキストの方が、タ形が「パーフェクト」を表していると考えて不思議のないものになっているのである。

もう一度、別の観点から工藤（一九九五）が「過去」と「パーフェクト」の違いを述べたものを見てみよう。

〈完成相過去〉の典型的機能は、現在と切り離して、複数の出来事間の時間関係を表すことである。〈パーフェクト相現在〉の典型的機能は、他の出来事との関係は無視して、現在との関係づけの中で、出来事を提示することである。

（工藤（一九九五）、百四十一頁）

先の文章は会話文ではあるが、れつきとした「物語」を語っているのであって、このまま延々と続けば一人称小説になるところである。そこでは「発話時」が文字通りの「発話時」とは限らない。物語では、出来事の推移に従って「発話時」が刻々と移っていつている場合もある。こう考えた場合には却って「完成相過去」ではなく、「歴史的現在」としての「近接過去のパーフェクト」と捉えられることになるのである。

このように、同じ用例が「過去」とも「パーフェクト現在」とも解釈されるということが、色々な言語のテンス・アスペクトの研究のネットワークの一つになっていると思われる。しかしそこで敢えて、第

一章第一節で提示した疑問に回答しておきたい。

「パーフェクトタイプ現在」はありうるか。これは、第一章第二節で述べたように、ありうる。ブルガリア語とグルジア語がその実例である。しかし、「パーフェクトタイプ」と「インパーフェクトタイプ」の形式上の区別のない言語では、どちらであるか決定する根拠は乏しい。敢えて区別する立場もありえようが、古典日本語の場合、動詞の単独の形では「インパーフェクトタイプ」に違いない用例は少ないことから見て、全て「インパーフェクトタイプ」と考えることが適当と思う。

非タ形が「インパーフェクトタイプ現在」だとして、それをタ形に換えると「パーフェクトタイプ過去」に見えるのは何故か。単に「過去」ということでは、「パーフェクトタイプ」も「インパーフェクトタイプ」も両方同じ可能性としてある筈である。終止形が「インパーフェクトタイプ」でも、連用形＋タが「パーフェクトタイプ」に見えてしまふとしたら、連用形までを「パーフェクトタイプ」と見て、それを「近接過去のパーフェクト」と見ているからではなからうか。もしも同じ用例を「インパーフェクトタイプ過去」と見る場合は、「発話時」を「設定時」に一致させて、そのタ形を非タ形に置き換えた文（つまり現在形で叙述された文）を頭の中で想定して、「インパーフェクトタイプ」と判断しているのではなからうか。例えば次のような用例は、「インパーフェクトタイプ過去」とも考えられる。

（前略）或所まで来ると橋だの岸だのに人が立って何か川の中
の物を見ながら騒いでゐた。それは大きな鼠を川へなげ込んだ

のを見てゐるのだ。鼠は一生懸命に泳いで逃げようとする。鼠には首の所に七寸ばかりの魚串が刺し貫てあつた。頭の上に三寸程、咽喉の下に三寸程それが出てゐる。鼠は石垣へ這上らうとする。子供が三人、四十位の車夫が一人、それへ石を投げける。却々当らない。カチツゝと石垣に当つて跳ね返つた。見物人は大声で笑つた。鼠は石垣の間に漸く前足をかけた。然し這入らうとすると魚串が直ぐにつかへた。そして又水へ落ちる。鼠はどうかして助からうとしてゐる。(後略)

(城の崎にて、傍線福沢)

「騒いでゐた」「刺し貫てあつた」は状態性用言だからインパーフェクティブに違いないが、「跳ね返つた」「笑つた」「かけた」「つかへた」と「逃げようとする」「這上らうとする」「投げる」「落ちる」とを区別する根拠は乏しい。「跳ね返る」「笑ふ」「かける」「つかへる」としても問題ないように思える。このように「歴史的現在」としての叙述を想定すれば、アスペクトは「インパーフェクティブ」で、原文のタ形(「跳ね返つた」等)は「過去」を表していることになる。しかし、もし原文のタ形が「パーフェクティブ」だと解釈するのであれば、それは「過去」ではなく、タまで含めて「歴史的現在」つまり「近接過去のパーフェクト」として見ているのではなからうか。^{注十四}

「パーフェクト」形式が連続しうるかどうかは、汎言語的に不可能だとは言えないだろう。^{注十五} ちょうど、英語では現在完了形に過去の特定時を表す時の副詞句が共起し得ないとか、日本語の小説では欧米

のものに比して遙かに現在形による叙述が多いとかいうことと大して違ひのないことである。

きょういじ

動詞の限界性(telic/atelic)、浮き彫り(ヴァインリヒ)、時の副詞句との共起関係、人称の問題、従属節の従属度ないし階層性の問題(南不二男)、また、しばしば言及した「眼前描写文」「状況説明文」といった文の分類、代行描写の問題など、当然触れるべき事柄について多くは触れ得なかつた。また触れるべき先行研究に触れていないことを懼れる。別の機会に改めて論じたい。

付記 本稿を成すに当たり、中山昭彦先生には、先生の「語る私」「語られる私」の概念と本稿の「語り手」「視点」とが別のものであることなど、有益な助言を頂いた。

用例出典

漢字は現在通行の字体に直す。仮名遣いは、基本的に原文通りとするが、拗音・促音を表す「や・ゆ・よ・つ」は小字の方が便利と思うので直す。

井上光貞『日本の歴史1神話から歴史へ』(中公文庫、一九七三) 志賀直哉「正義派」『志賀直哉全集 第二巻』(岩波書店、一九七

三)

志賀直哉「城の崎にて」『志賀直哉全集 第二巻』(岩波書店、一九七三)

津島佑子「空中ブランコ」『謝肉祭』(河出文庫、一九八一)より『謝肉祭』中の一編

参考文献

- 拙稿(一九九七) タリ・リと動詞のアスペクチュアリティ『国語学』百九十一集
- 糸井通浩(一九八二)「歴史的現在(法)」と視点『京都教育大学国文学会誌』十七号
- 工藤真由美(一九八九)現代日本語のパラフェクトをめぐる『ことばの科学3』(むぎ書房)
- 工藤真由美(一九九五)『アスペクト・テンス体系とテキスト——現代日本語の時間の表現——』(ひつじ書房)
- 小池聡子(一九九四)実況放送のアスペクト——眼前描写文と状況説明文とを対比して——『東京女子大学言語文化研究』三号
- 高橋太郎(一九八五)『現代日本語動詞のアスペクトとテンス』(国立国語研究所報告82(秀英出版))
- 仁田義雄(一九八九)モダリテイの体系と構造についての概観『日本語のモダリテイ』(仁田義雄・益岡隆志編、くろしお出版)
- (『日本語のモダリテイと人称』(ひつじ書房、一九九二)による、
原題「現代日本語文のモダリテイの体系と構造」)

野田尚史(一九八九)真性モダリテイをもたない文『日本語のモダリテイ』(仁田義雄・益岡隆志編、くろしお出版)

山田良治(一九五七)現代作家と代行描写『言語生活』七十二号

COMRIE, Bernard(一九七六)『Aspect』(Cambridge University Press)(山田小枝訳『アスペクト』(むぎ書房、一九八八)も随時参照)

COMRIE, Bernard(一九八五)『Tense』(Cambridge University Press)

GENETTE, Gérard(一九七二)『Figure III』(花輪光・和泉涼一訳『物語のディスクール 方法論の試み』(水声社、一九八五)による)

PRINCE, Gerald(一九八二)『Narratology: The Form and Functioning of Narrative』(遠藤健一訳『物語論の位相—物語の形式と機能』(松柏社、一九九六)による)

PRINCE, Gerald(一九八七)『A Dictionary of Narratology』(遠藤健一訳『物語論辞典』(松柏社、一九九七増補版)による)

REICHENBACH, Hans(一九四七)『Elements of Symbolic Logic』(石本新訳『記号論理学の原理』(大修館書店、一九八二)による)

注

注 一 小池(一九九四)。「状況説明的」が対立概念。仁田(一九八九)の「現象描写文」「判断文」の対立に近いが、「現象

描写文」にはテンスがあるとされている点が本稿の主張と異なる。この点については後述。

注二

この「完成相」とは、「パーフェクティブ」にほぼ同じである。完成相の基本的な意味は、動詞のあらわす動作(広義)、または、その一定の局面を、分割することなく、始発から終了までふくめて、まるごとのすがたでさしだすことである。完成相は、動詞のあらわす動作過程の運動または結果の局面をとりだして、その局面のなかにあるすがたをあらわす継続相と対立する」(高橋(一九八五)、三十三頁)「継続性を無視して時間的に限界づけてとらえる」(工藤(一九九五)、六十六頁)そして次のような表が示される。

テンス	アスペクト	
	完成相	継続相
非過去	スル	シテイル
過去	シタ	シテイタ

しかしこの「完成相」「継続相」が形態的な概念なのか、意味的な概念なのか、曖昧である。

注三

ライヘンバッハ(一九四七)。

注四

但しコムリー(一九七六)によれば「パーフェクティブ」が全て瞬間的な現象ではない(十七〜十八頁)。しかし瞬間的な出来事を瞬間的に捉えた場合に「インパーフェクティブ」で表すことは困難である。

注五

コムリー(一九八五)、三十七頁。但し、遂行動詞でも問題はあ。『約束するよ』というの、瞬間的な行為とも言えるが、『今後暫くの間破らない』という意味表明とも言える。後者なら瞬間的な出来事ではない。

注六

コムリー(一九八五)、三十七頁。

注七

うち「経験のパーフェクト」「持続する場面のパーフェクト」はもっぱら状況説明文に用いられ、眼前描写文では用いられない。なおそれぞれの例文は後に示す。

注八

プリンス(一九八二)。もしも「語り手」のない文があるとしたら、それは「真性モダリティのない文」(野田(一九八九)の一種であろう。例えば次のようなものが考えられる。

XはYがZだ(文法用語)

急がば回れ(ことわざ)

翼を下さい(作品の題目)

注九

但しこの種の文は状況説明文であり、眼前描写文と全く同じような分析をする必要はないのかもしれない。

注十

尤も、「完了」と呼ぶ論者は、暗黙のうちに「現在」を指摘していたことになる。

注十一

言語学研究会のように、日本語でも過去形と現在形をパラダイムとして考える立場もある。

注十二

山田(一九五七)の用語。現在一般的とは言えないが、事は「話法」の問題ではないと考えているので、敢えてこれを代表させた。

なお、語り手が登場人物なのに、別の登場人物の視点で語

るタイプの代行描写もあるが、それについては詳しく述べる機会を別に持たたい。

注十三

尤も、「パーフェクト」が必ずしも「パーフェクティブ」ではないことはコムリー（一九七六）も指摘している。しかし、「インパーフェクティブ」よりも「パーフェクティブ」の方が似つかわしいこともまた指摘している（六十一〜六十四頁）。

注十四

この理解は糸井（一九八二）とほぼ共通する。

注十五

本稿の分析では、必然的に、ヨーロッパ諸言語の単純過去形が「近接過去のパーフェクト」形である可能性を示唆する。現在形ではない、「近接過去パーフェクトかつ過去」形と解釈すれば、あながち暴論でもないだろうが、よく考えてみたい。